

発達検査と対人援助学

② 発達検査のミクロ、メゾ、マクロ

大谷 多加志

違和感

発達検査について、時に特定の検査項目に対する反応をもとに「この反応からどのようなことが言えるか」「この反応から自閉症スペクトラムの可能性を指摘してもよいか」などのご質問を頂く場合があります。もちろん、発達検査の結果は特定の障害や疾病の診断の根拠にはなりませんし、その中の特定の項目に対する反応で断定的なことが言えるわけありませんが、“なぜこの質問と繰り返し出会うのか”、“この質問を受けた時の、何とも言えない違和感は何なのか？”という疑問がくすぶっていました。違和感の正体は言うならば、“なんだか極端な話だな…”という感覚なのですが、この「極端さ」をどう表現してよいものなのか、つかみかねていました。先日、社会福祉に関連する資料を眺めているときに、「ミクロ・メゾ・マクロ」という項が目にとまりました。これまでに何度も目にしては、“まあ、当たり前なことが書かれているな”とそれ以上気に留めていなかったのですが、この時は“例のもやもやをこれで整理できるのでは？”と思いつきました。

ミクロ・メゾ・マクロ

まず、「ミクロ・メゾ・マクロ」について説明すると、「ミクロ」は一般に小さいとか

微視的などの意味を持ち、ソーシャルワークにおいては個別援助など、「個」に焦点をあてた捉え方を指します。一方の「マクロ」はその反対で、大きいとか、巨視的などの意味を持ちます。ソーシャルワークの中では地域援助や社会への働きかけなどを指します。「メゾ」は「ミクロ」や「マクロ」に比べると聞きなじみが薄いかもかもしれませんが、「中間の」を意味しており、ソーシャルワークでは集団援助など、個人と地域との間である家族や「グループ」や「集団」に焦点を当てます。ちなみに、この「メゾ」は音楽で習った「メゾピアノ」とか「メゾフォルテ」とかの「メゾ」と同じだそうです。

「ミクロ・メゾ・マクロ」が指し示すものは分野によっても少しずつ違って、例えば「ミクロ経済」とか「マクロ経済」と言ったりすることがありますが、この場合の「ミクロ経済」では消費経済の最小単位である「世帯」に焦点をあてます。福祉でのミクロは「個人」ですが、経済という視点で見ると「世帯」であるということで、なるほどと思えます。

発達検査のミクロ・メゾ・マクロ

これを踏まえて、発達検査における「ミクロ・メゾ・マクロ」とは何かを考えました。冒頭の例を用いて具体化すると

ミクロ: 子どもの具体的な反応 (特定の項目での特定の反応など)

メゾ: 検査者による臨床的な評価 (発達の見立てや解釈)

マクロ: フォーマルな検査結果としての評価 (通過・不通過の判定や数値的な結果)

という風に整理してみました。

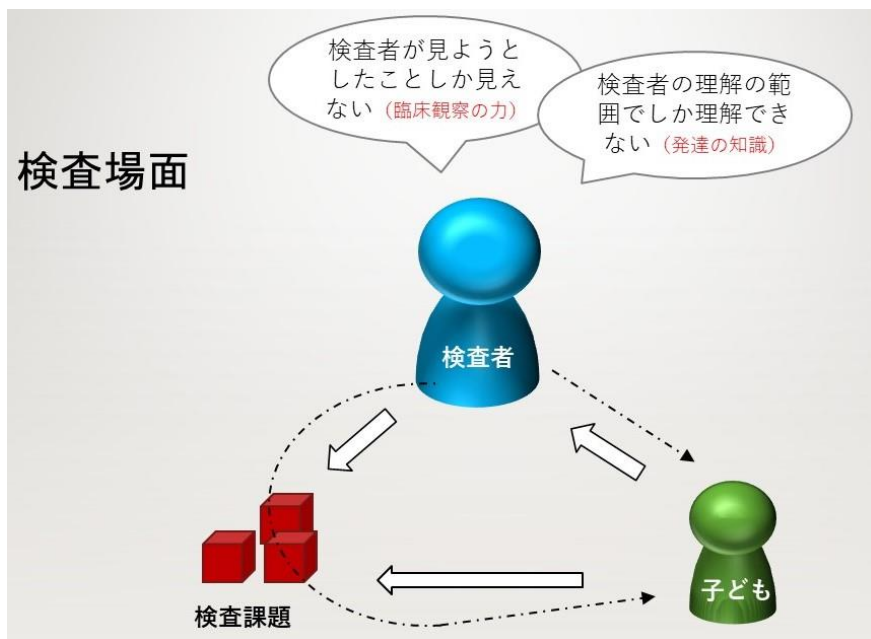
要するに、検査場面における子どもの具体的な反応をミクロの視点で観察し、それを数千名超の標準化資料というマクロな基準と照らし合わせることで対象者の発達状態を評価することが、発達検査が行っていることであると言い換えることができるかもしれません。

このように考えると、冒頭で述べた違和感が少し理解できたような気がします。通常、「特定の障害や疾患の診断」は医師を中心にさまざまな研究知見に基づいて定められた「診断基準」に照らして行われます。た

くさんの臨床事例や臨床知見に立脚したものであり、「マクロ」の視点によるものと言えるでしょう。つまり、「特定の検査項目に対する特定の反応」という「ミクロ」な要素からいきなり「マクロ」である診断について語り始めることに、ギャップというかズレを感じていたのだと思います。

一般に、「ミクロ」と「マクロ」は優劣ではなく、それぞれの視点から見るのが重要です。例えば「診断」について言えば、客観的かつ医学的な評価である「診断」があることで社会的な理解や配慮が得られやすくなったり、社会的施策が利用できるというメリットがあります。一方で、「自閉スペクトラム症です」と言われても、具体的に、どのような時にどのような配慮や支援が必要であるかは個人によって様々で、個別性が伝わりづらくなるというデメリットもあると思います。

検査場面で検査者が行っていることを図のように整理してみました。



この中で「ミクロ」の視点は、子どもの行動や反応です。各検査課題に対する反応はもちろん、検査課題とは関係のない子どもの行動（例えば離席とか、姿勢の崩れとか）も「ミクロ」で観察すべき点でしょう。検査場面における子どもの反応は、検査者の行動観察によって確認され記録されますが、この内容は「検査者が観察しようと思っっているポイント」に限定されてしまうことに注意が必要でしょう。例えば、子どもが用具を操作している最中に、その様子には気を配らず検査用紙にメモを取るのに忙しくしていたとすれば、課題の成否の判断に必要な情報は得ることができませんが、“どのような過程で取り組んでいたのか”という情報は抜け落ちます。子どもが課題に取り組みながらつぶやいていることも、中身まで聞き取ってみれば何か意味が見えてくるかもしれませんが、『検査中、独語が多い』と記録してしまえばそれ以上の解釈は不可能になります。「メゾ」、「マクロ」の視点で考えるために必要な一次情報でもありますので、実はここが一番重要で、それゆえに検査者には十分な「臨床観察」の力が求められると言えます。

次に検査場面における「マクロ」について考えます。検査項目の「通過」「不通過」の判定や、発達年齢などの数値的な結果の算出は、数千名の標準化データに基づいて客観的に判断されるものであり、幅広い年齢の多人数の発達の経過という「巨視的」な視点から、当該の子どもの発達をみようとしていることとなります。「発達年齢」や「発達指数」などの一定の客観的な指標が得られることが利点ですが、数値的な結果は同程度であっても臨床像には大きな違いがあ

るという場合も少なくありません。「診断」と同じで、大きな傾向をつかむことはできませんが、個別性は見えづらくなります。

そういった意味では、臨床的な検査の利用においては、「ミクロ」の行動観察をベースとし、「マクロ」な評価をいったんは行った上で、子どもの個別的な発達像について「メゾ」の視点で考えていくことが重要かもしれません。「ミクロ」で見た具体的な事象をもう少し抽象化したレベルで整理したり、「マクロ」の視点で得られた結果をもう少し具象化して掘り下げたり、というイメージです。

ミクロからマクロ、メゾ

それぞれ、少しだけ例を挙げてみます。ある検査結果の記録の中に、このような文面がありました（実例を元に創作しています）。『積木の扱いが荒い（衝動性？）』です。どうやら、積木を提示した時に、机に打ち付けたり、放り投げたりし、検査者が期待したような反応（積む）が生じなかったようで、その原因を「衝動性」に求めています。「積木を机に打ち付けたりする」というのがミクロの事象で、その背景仮説としての「衝動性」がマクロの視点による解釈ということになります。が、やはりやや飛躍がある感は否めません。「ミクロ」からいきなり「マクロ」に飛んでいるからかもしれません。その時の検査結果を全体的に眺めてみると、どうやら認知的な発達の水準は1歳を超えていないようでした。ピアジェの理論で言えば「感覚運動期」にあたる時期です。自分の身体や感覚を使って周りの世界を認識していこうとするため、手にした物を口に含んだり、何かとぶついたりして、その感触や手

ごたえなどを通して対象物を理解しようする時期で、この子どもの積木の扱いも発達段階に応じた自然な反応であるようにも思えます。要約すると、「積木の扱い」というミクロの事象を、「全体的な発達」というマクロから捉えなおすことで、『現在の認知発達の状態に応じた自然な反応である』とメゾの視点での解釈が可能になったと言えるかもしれません。

マクロからミクロ、メゾ

検査結果の指数について、認知面と言語面で見えた目上の数値に差があるケースでした。言語面の方が数値は高いのですが、実際の子どもの様子を見ると特別に“言葉の方が達者”という印象でもなく、数値的な結果に検査者が戸惑っていました。

そこで具体的に各検査項目への反応を確認してみると、認知面・言語面とも一定の年齢区分の項目までは確実に通過しているのですが、認知面が頭打ちになった後、言語はやや不確かな答え方で通過したりしなかったりしていることがわかりました。認知面の方は、その辺りから検査項目の数自体が少なくなっていたので、検査構造が影響している可能性もあります。言語面の課題には、“とにかく何かは答える”という対応をしている子だったので、“合っているのか違うのか微妙”な反応や、“一応合っているけど、本当に質問の意味がわかって答えているのか…?”と思われる反応もありました。このように考えると、確かに言語の結果の方がいくぶん高いことは間違いないのですが、認知面も言語面も確かさがある発達の水準はほぼ同程度で、それ以降は“とにかく反応する”という方法で部分的であれ

達成することができるものが言語面の方に多かったという捉え方も可能かもしれません。この例は「検査結果の数値の差」というマクロの捉え方と、「普段の子どもの印象」というミクロの捉え方の間のギャップについて、各年齢区分における課題の達成の度合いや各検査課題での反応内容という「メゾ」の視点でとらえなおしたと言えるかと思えます。

ミクロ、メゾ、マクロを行き来する

実際のところ、子どもの具体的な行動や、それに基づく検査の判定は、一定の客観的事実であるわけですが、そこから“子どもの発達についてどのようなことが言えるか?”という解釈の部分については、あくまでも仮説にとどまることとなります。もちろん、仮説には有力な仮説から迷信・デマレベルのものまであり得るわけですから、私たちはなるべく妥当性のある、支持根拠の十分にある仮説を提示することが必要です。そのために必要なものが、課題の成否とは関係のない子どもの一瞬の表情や発言であったり（臨床観察）、発達に関する知識であったり、得られた情報から安易な結論に飛びつかず冷静に検討する態度であったりするのだと思います。これらを行き来しながら、子どもの行動の背景にある発達の状態や認識、思考、興味・関心などに思いを巡らせることが、実体のある子ども理解につながっていくのではと考えています。